カモ目カモ科

マガン

Anser albifrons albifrous（Scopoli, 1769）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種（亜種）は、宍道湖西岸を中心に安定して渡来し、福井平野から西では唯一の集団渡来地として貴重である。一極集中的傾向が強く、病気の発生等によっては個体群消滅の恐れがある。

【概要】

全長72cmの中型のガン類。シベリアなどの極北地で繁殖し、国内には冬鳥として東北地方を中心に約18万羽が渡来する。かつては全国各地で見られたが、狩猟圧や越冬環境の悪化などにより急激に減少した。国の天然記念物に指定され保護されるようになり、渡来数が回復してきたが、分布は局地的である。

【県内での生息地域・生息環境】

ねぐらは、宍道湖湖心部や斐伊川下流から河口部で、宍道湖西岸域の水田などを餌場とする。1979年以降渡来数が増加し、2010年以降は4,000羽以上を数えるようになった。しかし、最近は2000年代までの増加傾向と異なり、前年の最大数を下回る年もある。

【存続を脅かす原因】

鳥インフルエンザなどの伝染病、水田の秋耕などに伴う餌場の消失など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	○	○														○	○	○					○	

カモ目カモ科

コハクチョウ

Cygnus columbianus jankowskyi Alphéraky, 1904

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵6

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

宍道湖は、本種（亜種）の日本列島における集団渡来地の西南限にあたる。現在のところ、本種の個体群は安定しているが、餌場環境は年々悪化しており、今後さらに進行する恐れがある。

【概要】

シベリアのツンドラ地帯などで繁殖し、国内には冬鳥として渡来する。これまで、北海道を経由して日本列島を南下する渡りのコースが知られていたが、日本海を直接横断して渡来する個体群も確認されている。他地域とは繁殖地が異なる個体群の可能性など、学術的にも注目される。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖周辺では、斐伊川下流から河口部を中心とする宍道湖西岸域や、潟の内に定期的に渡来し、最近では1,000羽前後を数える。中海周辺では、飯梨川河口や能義平野などに渡来する。餌場は広大な水田地帯であり、川の中州や水を張った田んぼ、潟の内にある池などをねぐらとする。

【存続を脅かす原因】

水田の乾田化、裏作、秋耕などに伴う餌場の消失など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	○	○								○	○					○	○	○					○	

カモ目カモ科

ツクシガモ

Tadorna tadorna（Linnaeus, 1758）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵6

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

国内では、干潟の埋め立てなどにより生息地の減少などが懸念されている種で、県内にも毎年少数が渡来するが、県内には本種が好む干潟のような浅瀬はほとんどなく、生息基盤が脆弱である。

【概要】

全長約60cm。体は白く、頭と肩羽は緑色の光沢がある黒で、背から胸に栗色の帯がある。ヨーロッパ中部の沿岸、黒海周辺から中国東北地区までのアジア中央部など広い地域で繁殖し、冬は北アフリカ、ヨーロッパ南部、インド北部、中国、日本などに渡る。国内では、ほぼ全国的に記録があるが、毎年定期的に渡来する地域は少ない。おもに海岸や河口部の干潟に生息し、甲殻類、貝類、底生動物を食べる。干拓地や水田などで見られることもある。

【県内の生息地と生息環境】

宍道湖や中海には少数が冬鳥として毎年渡来している。また、高津川河口などにも観察記録がある。

【存続を脅かす原因】

河口域の工事や、湿地開発などによる生息適地の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	○	○														○	○	○					○	

カモ目カモ科

オシドリ

Aix galericulata（Linnaeus, 1758）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵6

島根県固有評価：－

環境省：情報不足（DD）

【選定理由】

樹洞で営巣するなど、カモ類の中でも特異な生態を持ち、生息数も多くない。自然度のバロメータとしても貴重な種であるが、生息基盤が脆弱で、今後さらに生息環境の悪化が進行する恐れがある。

【概要】

全長45cmの小型のカモ類で、中国東北部、朝鮮半島、ウスリー、日本などに生息する。冬季には、日本で繁殖した個体が暖地へ移動するほか、大陸から冬鳥として渡来する。周囲を森林で囲まれた河川、渓流、池、ダム湖を好み、木の枝にもよくとまる。雑食性で、林の中の渓流や陸上でシイ・カシ類などのドングリを好んで食べる。水辺やその周辺の大木の樹洞で繁殖し、巣箱を利用することも知られている。

【県内での生息地域・生息環境】

山間部の渓流やダム湖などに生息し、江の川や高津川などには特に多い。冬季に群れで渡来する個体が多いが、中国山地や隠岐島の一部では繁殖もしている。

【存続を脅かす原因】

繁殖に適した樹洞のある古木の減少、シイ・カシ類の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○		○	○		○		○	○	○		○			○	○						

カモ目カモ科

トモエガモ

Anas formosa Georgi, 1775

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

極東地域特有の種で、わが国には冬鳥として渡来するが、1930年前後を境に渡来数が急激に減少している。県内への渡来は年によって差があり、今後急速に減少する恐れがある。

【概要】

全長約40cmの小型のカモ。オスの顔には黄白色と緑色、黒色からなる巴形の模様がある。胸は赤紫褐色で、脇は青灰色。背からの上面は褐色に見える。メスは全体に褐色で嘴の基部に白斑がある。シベリア東部で繁殖し、多くは中国南部や朝鮮半島で越冬する。国内には冬鳥として渡来し、個体数は石川県の片野鴨池など、本州以南の日本海側に比較的多い。

【県内の生息地と生息環境】

宍道湖などの湖沼のほか、高津川河口や溜池などでも見られる。渡来数は年により変動し、記録される数は数羽から数千羽になることもある。一時的な出現のことも多く、宍道湖で数千羽の群れが見られたときも、滞在期間は短かった。

【存続を脅かす原因】

生息適地の環境悪化など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○				△					○	○				○	○	○					△	

ペリカン目サギ科

サンカノゴイ

Botaurus stellaris stellaris（Linnaeus, 1758）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵6

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

本種（亜種）の国内の分布は局地的で、個体数も多くない。また、ヨシ原などの生息環境適地が減少しており、さらに進行する恐れがある。

【概要】

全長約70cmで、全体に淡黄褐色と暗褐色のまだら模様をしている。種としての繁殖分布はユーラシア大陸中部に広がり、北のものは東南アジア、インド、アフリカで越冬する。国内では、本亜種が北海道で夏鳥または留鳥、本州以南で留鳥または冬鳥として生息する。おもに平地の河川や湖沼のヨシ原など、広い湿性草原に生息するが、個体数は少ない。日中はヨシ原に潜んでいて、開けた場所にはほとんど姿を現さないうえ、警戒心が強いため観察されにくい。水辺で魚類や両生類、昆虫類、甲殻類などを採食する。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として河川や湖沼のヨシ原などに渡来するが、観察されにくいため、個体数などの生息状況について不明な点が多い。

【存続を脅かす原因】

湿地開発や河川改修などによるヨシ原などの生息適地の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○		△	○															○	○					○	

ペリカン目サギ科

クロサギ

Egretta sacra sacra（Gmelin, 1789）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種（亜種）の県内における個体数は多くなく、生息基盤が脆弱であるため、今後容易に減少する恐れがある。

【概要】

全長約62cmで、全身が黒い（本種には白色型があり、南西諸島以南では白色型が多くなるとされている）。種としては、東南アジアからオーストラリアに広く分布する。国内では本亜種が本州以南に留鳥として特に岩礁の多い海岸に生息し、局地的に繁殖する。魚類、甲殻類などを採食する。繁殖期には、小集団あるいはつがいごとに分散して、海岸などにある低い木の上や岩棚、岩の隙間などに巣をつくる。

【県内での生息地域・生息環境】

留鳥として海岸に生息する。岩礁のある崖地、島嶼などで繁殖も確認されているが、個体数は多くないと考えられる。

【存続を脅かす原因】

海岸部の開発などによる生息適地の減少。営巣地やその周辺への人（磯釣りなど）の立ち入りなど。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	岩礁
○	○	○	○																					○	○

チドリ目チドリ科

イカルチドリ

Charadrius placidus Gray et Gray, 1863

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種は、以前は河川の中流域などで比較的普通に見られたが、近年その姿を見る機会が少なくなっている。生息基盤が悪化傾向にあり、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長20cmほどのチドリの仲間で、河川の中流域などで繁殖する。繁殖期には「ピィ ピィ」と澄んだ声で鳴きながらテリトリーの上空を飛び回る。国内では九州以北で留鳥として分布し、北海道で夏鳥として渡来するほか、南西諸島では少数が越冬する。繁殖は、主として河川中流域の川原で行い、小石を集めた簡単な巣を作る。留鳥として生息するが、北日本のものは冬季暖地に移動する。県内では、移動してきた個体を含め、冬季に多くの個体が観察される。

【県内での生息地域・生息環境】

県内の河川中流域などに留鳥として生息し、川原の砂礫地などで少数が繁殖している。

【存続を脅かす原因】

河川改修や、河川の氾濫の減少に伴う砂礫河原の減少、河原の草地化など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	△								○	○	△				△	○	△					△	

チドリ目チドリ科

シロチドリ

Charadrius alexandrinus dealbatus（Swinhoe, 1870）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本種（亜種）は、全国的に個体数が減少傾向にある。県内でも繁殖するが、その数は多くなく、人の活動の影響を受けやすい場所にも見られることから、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長17cm。種としては、ユーラシア大陸や北アメリカ大陸などに広く分布し、おもに沿岸部で繁殖する。国内では、本亜種が本州以南で留鳥として、北海道で夏鳥として分布し、海岸の砂浜や河川の河口から中流部にかけての砂礫地で繁殖する。餌はおもに動物質で、昆虫類やクモ類、ゴカイ類などを食べる。

【県内での生息地域・生息環境】

留鳥として、砂浜海岸や大河川河口部の砂礫地などに生息する。繁殖はほとんどが砂浜やそれに隣接する造成地で、ある程度の広さを必要とする。県内37カ所の砂浜で調査したところ、繁殖の可能性があるつがいは海岸距離が500mよりせまい砂浜では確認できなかったという結果もある。

【存続を脅かす原因】

営巣地への人の立ち入り、砂浜の侵食、環境改変など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○														△	△					◎	○	

チドリ目シギ科

ハマシギ

Calidris alpina（Linnaeus, 1758）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

以前は、宍道湖・中海周辺の湿地や水田で普通に見られたが、近年極端に渡来数が減少してきた。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長20cmほどの小型のシギ類。北半球の湿地に広く生息する。国内には、亜種ハマシギが旅鳥または冬鳥として渡来するとされるが、未記載のアラスカ産の亜種なども渡来していると考えられる。やや長めの嘴を持ち、嘴と脚は黒く、夏羽では腹の色が黒くなる。群れで行動し、一群の鳥は採餌、移動、休息などを一斉に行う。河口部の湿地や水田などに飛来し、ゴカイや小型甲殻類などを採食する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内には春と秋の渡りの時期や、冬季、越冬のために、大河川の河口部や湖沼周辺の水田などに渡来する。以前は数十から数百羽の群れが各地で見られたが、近年は越冬する個体群を中心に、著しくその数が減少している。

【存続を脅かす原因】

繁殖地や中継渡来地の環境悪化、餌場とする干潟や浅瀬の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○														○	○	○				○	○	

タカ目タカ科

ハイイロチュウヒ

Circus cyaneus cyaneus（Linnaeus, 1766）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

チュウヒに比べ減少傾向は顕著ではないが、渡来数も少なく、生息地である広いヨシ原の消失などもあり、今後急速に減少する恐れがある。

【概要】

オスは全長約45cm、メスは約50cm。オス成鳥は、上面と顔から胸までが灰色で下面外側初列風切羽が黒い。メスは上面が褐色で、下面は淡褐色に風切と尾羽に横帯があり、上尾筒は白い。種としては、ユーラシア大陸の亜寒帯や北アメリカ大陸の北部で繁殖し、冬期は南下して越冬する。国内には冬季に関東以南のヨシ原や平野部の草原、農耕地などに渡来するが、個体数は少ない。ネズミや小鳥類、カエルなどの小動物を捕食する。翼をV字型に保って低空を滑翔する。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として、河川や湖沼のヨシ原や農耕地、高原の草地などで観察される。

【存続を脅かす原因】

湿地開発、河川改修などによる生息適地の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	△	△					○						○	○	○	○			○		○	

フクロウ目フクロウ科

フクロウ

Strix uralensis Pallas, 1771

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

以前は、比較的普通に見られたが、近年、その姿を見ることが少なくなった。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長約50cm。頭部から上面は淡褐色で下面には白地に褐色の縦斑がある。羽角はなく、眼は黒い。国内では４亜種に分類されているが、亜種ごとの分布域は明確ではない。留鳥として九州以北の平地から山地の林に生息する。日中は暗い林の中で休息し、夕暮れから活動し始めることが多いが、日中に活動することもある。おもにネズミなどの小型哺乳類や小鳥類を捕食する。夜間に「ゴゥホゥ ゴロッケ ゴゥホゥ」と鳴く。おもに大木の樹洞に営巣する。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに山地の林に生息する。平野部でも見られるが、繁殖には営巣可能な樹洞が必要。冬季は河畔林で見ることがある。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発による生息地の減少など。特に営巣が可能な樹洞がある大木の減少が大きいと考えられる。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○	△				○	△	△				○	△	△	△							

フクロウ目フクロウ科

アオバズク

Ninox scutulata japonica（Temminck et Schlegel, 1845）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

以前は、比較的普通に見られたが近年、その姿を見ることが少なくなった。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長約29cm。頭部から上面は黒褐色で、下面には白地に黒褐色の太い縦斑がある。国内には、亜種アオバズクが夏鳥として渡来し、奄美諸島以南には別の亜種リュウキュウアオバズクが留鳥として分布する。本亜種は、平地から山地の林に生息し、営巣が可能な大きな木がある社寺林などにも見られ、樹洞で営巣する。夜行性で、主として昆虫を採食するが、小鳥やネズミも捕る。夜間に「ホッホウ　ホッホウ」と鳴く。

【県内での生息地域・生息環境】

平野部から山地に広く分布し、営巣が可能な木があれば社寺林などでも見られる。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発によって生息地が減少しているほか、営巣が可能な樹洞がある大木の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○					○						○										

フクロウ目フクロウ科

トラフズク

Asio otus otus（Linnaeus, 1758）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

比較的まれにしか確認されない種（亜種）で、県内での繁殖の可能性もある。渡来数は多くなく、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長38cmほどの中型のフクロウの仲間で、耳の部分に当たる羽角が長く伸び出しておりよく目立つ。種としてはユーラシア大陸および北アメリカ大陸の冷温帯で繁殖し、北方の個体は南下して越冬する。国内では、本亜種が本州中部以北で局地的に繁殖し、本州中部以南では冬鳥として渡来する。平地や山地の林、農耕地、河畔林、草地などに生息し、ネズミ類をおもな餌としている。越冬個体は、大河川の河口部の草原などで見られることが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

斐伊川河口部の草原や農耕地、河畔林などで冬季まれに観察される。冬鳥として渡来するが、繁殖の可能性もあり注目される。

【存続を脅かす原因】

生息地である林や草原、農耕地の減少、繁殖する森林の減少、生息地への人や車両の立ち入りなど。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	△	△	○	△	△				○	○	○				○	○	○	○	○					○	

フクロウ目フクロウ科

コミミズク

Asio flammeus flammeus（Pontoppidan, 1763）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種（亜種）は、斐伊川河口部など、場所によっては比較的普通に見られたが、近年その姿を見ることが少なくなった。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

種としてはユーラシア大陸、南北アメリカ大陸、ハワイ諸島などに広く生息し、国内には本亜種が冬鳥として渡来する。全長39cmほどのフクロウの仲間で、耳のように見える羽角はごく短く、わずかに出ている程度であまり目立たない。河口部や河川沿いの草原などに棲み、地上近くを飛び回ってネズミなどの小動物を捕食する。普通、昼間は草むらの中で休息し、夕方から採餌行動を行う。フクロウ類としては珍しく、比較的明るい時間帯にも活動する。

【県内での生息地域・生息環境】

河口部の土手沿いの草原や、農耕地、干拓地などの広々とした草原に生息する。

【存続を脅かす原因】

生息地となる草原などの減少、人や車両の立ち入り、繁殖地の環境悪化など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	△	△	○												△	○	○	○	○			△		△	

ハヤブサ目ハヤブサ科

チョウゲンボウ

Falco tinnunculus interstinctus McClelland, 1840

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

冬鳥として農耕地などに見られるが、近年渡来数が減少していると考えられ、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

オスは全長33㎝、メスは約39㎝。キジバトほどの大きさのハヤブサ類。オスは頭頂から顔が青灰色、背中は茶褐色で黒い斑点がある。メスは上面が褐色で黒い斑点があり、下面は淡黄褐色で黒い縦斑がある。種としては、極地を除くユーラシアからアフリカに広く分布する。国内では本亜種が中部地方から北海道にかけて繁殖し、冬は全国各地に広がる。平地から高山の草地、農耕地、河原などに生息し、羽ばたきと、短い滑空を繰り返して直線的に飛ぶ。獲物となる小動物は、ネズミ類や小鳥類などで、停空飛翔をしてねらうことが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として、おもに平野部の農耕地や河川の草地などで見られる。

【存続を脅かす原因】

農耕地の減少や、河川改修などに伴う生息適地の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○							○	○					○	○	○							

スズメ目ホオジロ科

ホオアカ

Emberiza fucata fucata Pallas, 1776

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種（亜種）は、本州中部以北がおもな繁殖地であり、県内でも繁殖の記録がある。生息地が局在していることなどから、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長16㎝。ほぼスズメくらいの大きさで頬が赤褐色、頭から顎にかけては灰色、背中は褐色である。胸に黒と褐色の２本の横帯があるのが特徴。国内では、北海道、本州、四国、九州の各地で夏鳥として繁殖し、冬は本州の西南部以南で越冬する。平地から山地の草原に生息し、なかでも比較的草丈の低い乾いたところを好むという。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では河川敷の草原や農耕地などで少数が越冬する。また、1988年の浜田市の繁殖例をはじめ、県西部や東部の河川の河口部あるいは周辺の草原で繁殖が確認されている。

【存続を脅かす原因】

草原の開発や、遷移による生息に適地した草原の減少など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	◎	○		○					○	○					○	○	○							